
きみとスマイル

橘。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きみとスマイル

【Nコード】

N0107J

【作者名】

橘。

【あらすじ】

誰にも言えなかった。でも、わたしはずっとこんな仲間が欲しかったんだ。

たまたま友達の茜と学校の帰り道に通りがかった土手で、泉は茜の幼馴染、大吾からスケートボードの助っ人を頼まれる。けれど大吾はライバルの手前、助っ人が女である事を隠そうとして・・・。

1・泉

「なにいいいい！！！」

五月晴れのすがすがしい青空の下、気持ちのいい風が川辺を流れていく。川岸の向こう側を眺めれば、しまい忘れた鯉のぼりがその風に乗って揺れている。その穏やかな景色にそぐわない少年の叫びが五月の風に乗って響いた。

川原に作られた広場には10人前後の小学生達が集まっている。それぞれ思い思いの格好をした同い年ぐらいの少年達だ。彼らの共通点と言えば皆スケートボードを持っていることだろうか。

先程大声をあげたのはその中の一人だった。

「またかよ！今度は何だってんだ！」

叫び声の主である少年が怒りも露に声を荒げた。黒髪を短く刈ったその少年は怒りの為か、握り締めた拳を震わせている。彼の足元には彼のものであるう赤いスケートボードが無造作に置かれていた。

「お腹が痛いんだって。」

興奮する少年を目の前に、青い帽子をかぶった細目の穏やかな顔をした少年が答えた。どうやら、この少年のこういった姿には慣れているようだ。

すると、少年達の中で一番体の大きくごつい感じの少年が前に出た。小学生にしては大きな体をした少年だ。その風体にふさわしく、腕組みをして勝ち誇った顔で、未だ落ち着かない様子の黒髪短髪の少年にくっつかかった。

「で、どうすんだよ、大悟？このままだと俺達の不戦勝だぜ。つまり俺達の23勝目って事だ。」

しゃべり方も小学生にしては偉そうだ。

「うるさいな、ゴリ！第一、なんで23勝なんだよ！まだ22勝だろ！」

ゴリの一言によつて、大悟の怒りが増幅してしまったようだ。だが、その方向性は180度変わってしまったている。

「はあ！？何言つてんだ！23でいいんだよ！」

前触れもなく始まった二人の、実に子供らしい口喧嘩によつて、より公園内が騒がしくなる。だがその喧騒の中で他の少年達はまたか、といった表情で二人の様子を見守っていた。周りにとってはいつもの喧嘩という訳だ。

「本当は20勝なんだけどね。」

二人の会話を聞いて、その様子を遠巻きに見ていた黒髪の大人っぽい顔をした少年が落ち着いた様子で呟く。

「秀ちゃん。よく覚えてるね。」

おそらくもう誰も覚えていないであろう戦績を聞いて、隣に居た青い帽子の少年が本気で感心した。この少年はいつの間にか大悟の隣から秀という少年の隣に移動している。大悟とゴリの喧嘩に巻き込まれない為だ。

避けはするが、喧嘩を止めはしない。だが、それはこの少年だけではない。誰もが大悟とゴリの喧嘩を止めようとせず、遠巻きに見ているだけだった。

秀は帽子の少年を振り返った。

「どうする浜田？また4対4でやろうか？」

浜田は当然、といった顔でそれに答える。

「そうだね。」

「ゴリも不戦勝とか言っというて結局勝負するんだから、いちいち同じ事繰り返し返すなよなあ。」

秀と浜田の会話を聞いて、ボードの上に座っている茶髪の少年が呆れたようにこぼした。

「まあ、いいじゃん、浩太。二人の喧嘩はいつもの事だし。」

浜田が右下に視線を落とす。その顔には言葉とは裏腹に、浩太への同意が現れている。

「そうだけどさ。しかし強哉の病欠はこれで何回目だ？」

「5回目。」

またもや秀が落ち着いた声で溜息混じりに答えた。その表情はあの大悟やゴリと違って小学生らしくなく、どこか達観しているようだ。

「5回も病欠かよ。完全に名前負けだなアイツは。そのせいで俺、3回も審判やらされてるんだぜ。」

浩太は座っているせいで自分よりも高い位置にある秀の顔を見上げ、不満そうに口を尖らせる。それに対して、秀は表情を変えずに浩太の方を見た。

「それは浩太がジャンケンで負けたからだろ。」

「はいはい。いいよな、秀は。今まで全部出てんじゃない。お、終わったみたいだぜ。」

三人が大吾とゴリに目を向けると、浩太の言う通り二人は言い争いを止めていた。大吾とゴリは無言でそれぞれ皆の居る方に向かって歩き出している。だが、それも一瞬の静寂だ。せつかくの静寂をゴリの小さな不満の一言がぶち壊しにしてしまう。

「またこっちは4人かよ。」

それを聞いた大吾は勢いよくゴリを睨み付け、我慢できずに再び感情を顕に言い返した。

「うるせえな！もう一人連れてくればいいんだろ！！ちょっと待ってろ！」

そう言っただけゴリをひと睨みし、大吾はゴリの隣から皆の方へ駆けて来ると、声を大にして仲間を集めた。

「南小集合！」

大吾の号令に従って、彼の元が集まったのは3人だ。その中には浜田も居た。浜田は大吾のこの行動には驚いたらしく、困ったように大吾をいさめる。

「大ちゃん。あんな事言ったって南小にもうスケボー出来る奴はいないだろ？どうすんだよ。」

「だから、それは……。捜すんだよ。」

勢いで言ったは良いものの、やはり自分でも無茶だと分かっているようだ。その言葉は自信なさ気に小さくなっていく。

「今までも散々探したけどいなかったじゃないか。」

「そうだけだよ。」

浜田がそう言うのも無理はない。現在の小学生でスケボーをやる子供はとて少ないからだ。今はローラーブレードやローラー付シューズもあり、何よりスケボーは危ないと止める親が多い。塾や習い事をする小学生が多くなっているのもその原因の一つと言える。

大吾たちの通う南小も例外ではない。幼い頃、幼馴染の大吾とゴリの面倒を見てくれた近所の中学生がスケボーをやっていたのをきっかけに、小学3年生の頃から二人はスケボーを始めた。当時は二人の他にスケボーをやったことのあるものは居なかった。しかも二人の家がちょうど南小と西小の学区の境目にあったため、大吾は南小、ゴリは西小に通っていたのだが、お互いに同じ学校にスケボーをやるものは居なかったのだ。そこで、二人はスケボーを出来る者を探し、やったことの無いものには教えたりして仲間を集めた。

それが現在の仲間である。南小側、つまり大吾の仲間は浜田、強哉、小太郎、ヤス。西小側、ゴリの仲間は秀、浩太、広、ホリーの5人だ。昔からライバル心むき出だった大吾とゴリは、初めはどちらがより仲間を集められるか勝負していたが、どちらも5人ずつで限界だと知ると、今度は5対5のチームのリレー方式でどちらが速

いか勝負をするようになった。その戦歴は通算48回勝負して、南小21勝、西小20勝、7引き分けなのである。

だが、最近困ったことに南小のメンバーの一人である強哉がよく体調を崩すようになってしまった。しかもいつも、勝負の日に限ってなのである。強哉も決してわざと避けているわけではないのだが、大悟にとっては大きな問題だった。

リーダーの大悟が答えの出ない難関に頭を悩ませている時、聞きなれた声が上の方からかけられた。

「あ、大ちゃん！」

それは嬉しそうな女の子の声だった。南小の皆が声のした方を振り返ると、河原の土手の上に作られた道の上で二人の女の子が大吾達の方を見下ろしていた。肩までの黒髪を二つにくくり、ピンクのスカートをはいた女の子と、長い髪をたらし、ジーパンをはいた背の高い女の子だ。おそらく学校帰りなのだろう。二人の背には赤いランドセルが背負われている。声をかけてきたのはピンクスカートの子だ。こちらの少女は皆の顔なじみだった。

「何だ、茜かよ。」

二人目の幼馴染に大吾はどうでも良いとばかりにそっけなく答える。その態度を気にした様子もなく、茜は土手の坂を下りて、皆の下に笑顔で駆けてきた。

「あ、ゴリちゃんも。もしかしてまたスケボー？」

「そうだよ。なんか用か？」

茜の満面の笑顔にも相変わらず大悟は仏頂面だ。

「何よその言い方。大ちゃん達がいるのが見えたから声かけただけでしょ。」

茜と大悟がケンカしそうな雰囲気、今度は放っておくわけには行かないのか、浜田が話題を変えようと慌てて二人の間に口を挟む。

「あ、茜ちゃん。うちの学校でスケボー出来る奴知らない？」

「やめろよ。浜ちゃん。茜が知ってる筈無いだろ。」

浜田の気も知らず、茜に聞こえるように大きな声で大吾が抗議する。浜田も大悟の言葉に困った顔をするが、茜から返って来た答えは二人の予想とは違うものだった。

「知ってるよ。」

「えっ！！！」

誰もが諦めていた中、南小の皆が驚きの声を上げる。その反応に茜も驚きの表情を見せた。

「何だよ。知ってんなら何でもっと早く言わないんだよ。ちょっとこっち来い。」

大吾は茜の腕を掴んで皆の傍から離れた。茜は不服そうな顔をして、大悟についていく。だが、実際茜は大吾にかまってもらえるのが嬉しいのを大吾、ゴリ以外の皆が知っていた。

「で、誰なんだ。早く言えよ。」

「うん。でも……。」

「なんだよ。」

焦っている大吾は苛立ちを隠せない。だが、茜はその心を知ってか知らずか、なかなかその人物を言おうとはしなかった。言ってもいいのか迷っているようだ。

「今メンバーがいなくて困ってるんだよ。」

「そうなんだよ、知ってるなら教えて欲しいんだ。」

浜田が二人の後を追って話しに加わり、フォローに回る。茜は困ったような顔で上目使いに大悟の表情を見ながら口を開いた。

「言ってもいいんだけど、多分皆の仲間にはならないよ。」

「なんだよそれ。そんなの訊いてみなきゃ分からないだろ。」

いい加減我慢できないようだ。大悟は後ろのゴリたちを横目で気にしながら茜を促した。

「だって、絶対大ちゃん嫌がるもん。」

「なんでだよ。嫌がらないから言ってくれよ。」

いつもはこんなに短気ではない大吾も、西小のメンバーを待たせてることや、ライバルの目も arī いつも以上にイラついていた。それを感じ取ったのか、観念したように茜はとうとう白状した。

「女の子なの。それでもいい？」

その言葉を聞いた南小メンバーは全員黙り込んでしまった。さすがにその答えを予想する事は出来なかったようだ。男同士の勝負に女を入れることは大吾が一番嫌がると皆分かっているからかもしれない。

ない。茜は居心地が悪そうに大悟を見つめている。

南小メンバーの視線が答えを求めるように大吾に集まる。

「どうするの？大ちゃん。」

急に黙ってしまった大悟に浜田が念を押してみる。その顔を見ればわかるように、大吾はかなり迷っているようだ。メンバーを探すといった手前、大吾の性格上後には引けないし、だからといって女をメンバーに入れたらゴリに何を言われるか分かったものではない。大吾はゴリ達の方をちらりと見る。いつのまにか西小のメンバーは少し離れたベンチに座って、適当に話をしていた。

大悟は茜に視線を戻す。

「茜。」

「何？」

さっきまでとは違い落ち着いた大悟の声に、茜は顔を上げた。

「そいつは今すぐ来れるのか？」

「うん。」

茜は後ろを振り返る。

「だってあの子だもん。」

茜の指差す先にいたのは、茜と一緒に居た女の子だ。今も土手の上で茜の話が終わるのを待っていた。

彼女を見る南小の皆の顔は疑問に満ちている。誰も彼女のことを知らないようだ。

「あの子誰？」

ヤスが茜に聞いた。ヤスはゴリの次に背の高い痩せ型の少年だ。癖のある髪を短く刈っている。

皆がいぶかしがるのも無理はなかった。南小は3クラスしかないため、5年間も同じ学校にいて見たことのない生徒がいるのは珍しい。

「うちのクラスに一昨日転向してきた子なの。白崎泉ちゃん。」

「転校生か。どうりで見たことないと思った。」

皆の目が白崎に集まり、そして再び大悟に向けられた。

「お、ほんとに連れてきたみたいだぞ。」

浩太の言葉に西小メンバーが大吾達の方に目を向けると、確かに五人揃っていた。強哉の代わりのメンバーは皆が見たことのない、背が低めの帽子をかぶった子だった。

（あの帽子って、浜田の帽子じゃないのか？）

秀だけがそのことに気付く。

その考えは当たっていた。助っ人の彼がかぶっているのは浜田の帽子だ。

白崎泉に助っ人として参加して欲しかったが、女であることを知

られたくなかった大悟は、浜田の帽子を彼女に顔が見えないようにかぶせ、事情を話して男子のフリをしてもらうことにしたのだ。

女を仲間にした事を知られたらゴリにまた何か言われると思ったのだろう。少年独特の変なこだわりもその行動に至らしめるのに一役買っているのかもしれない。

ここまでは意地っ張りの大悟ならやりそうなことだと皆思っていたに違いない。その証拠に誰も反対しなかった。

意外だったのは、嫌がると思っていた白崎泉があっさりそれを承諾したことだ。

「おい、誰だよそいつ。」

ゴリの突然の質問に皆が一瞬動揺する。大悟が苦しげに口を開くとした瞬間、意外にも先に答えたのは白崎泉だった。

「5年の白崎。」

その日、幸いにも泉はジーパンに長Tシャツというラフな格好で、帽子で顔も隠れている。まだ声変わりをしていない子も多い小学生では泉の声を聞いても、女とは誰も疑わなかった。

ゴリが何も疑問を持たなかったことで、南小の皆は胸を撫で下ろす。大悟は強がって、どうだと言わんばかりに勝ち誇った表情を浮かべて見せた。だが、その内心はバレないかという不安でいっぱいではない。

南小は上手く乗り切ったように見えたが、大悟のタンカを実行できるわけないと思っていたのと、大悟の勝ち誇った顔を見て、ゴリは素直にその助っ人を認めるわけにはいかなかったようだ。またも腕を組んで威嚇するように前に出ると、いぶかしげな顔で泉のこと

を観察する。

「本当にそいつがスケボーできんのかよ。」

南小のメンバーは当然誰も泉が滑っているのを見たことがない。その為誰もそれに言い返すことはできず、顔を見合わせるばかりだ。大悟も先程とはうって変わって、不安を隠せない顔で自分の隣にいる泉の横顔を見る。

その沈黙を破ったのはまたも泉だ。

「できるよ。どうしたら信じる？」

「へえ、そうだな。じゃあ、タイムアタックだ。3分切れたら認めてやるよ」

言いながら、ゴリは勝ち誇った顔で小柄な泉を見下ろす。その言葉に南小も西小も皆が驚いた。

「3分！？はじめて走るコースなのに速すぎるだろ。」

ゴリのその提案にヤスが抗議の声を上げた。

彼らの言うコースとは、もちろんスケートボード用のコースなどあるわけないから、公共の道路を使って彼らが勝手に決めたコースのことだ。スケボーの音が五月蠅いとか、誰かにぶつかってしまった怪我でもさせてしまったら、すぐに親にスケボーを止めさせられてしまう。その為、スケボーで滑れる道路の内なるべく人通りの少ない場所を選んで構成しているのである。

ゴリの言っているそのコースは短めのタイムトライアル用で、その大体平均タイムが3分30秒。このメンバーの中で、そのコース

を3分切れるのは大悟、ゴリ、秀、ヤスだけなのだ。

だが、またも意外な答えが泉から返って来た。

「分かった。」

皆が呆気にとられるほど、あっさりと泉は承諾した。そんな彼女の表情は青い帽子のつばの下に隠れて誰も見ることはできない。

浜田が適当に拾った棒切れで地面に図を描きながら簡単にコースの説明をする。泉は浜田の隣にしゃがんでその説明を聞いていた。その二人を不安そうに周りが見守る中で、説明を聞き終えて立ち上がる泉に茜だけが気楽に声をかける。

「がんばってね。」

「うん、久しぶりだけどやってみるよ。」

他の者の心境など知らずに穏やかに会話する女子二人。南小のメンバーは、特に大悟は泉の正体がバレないかハラハラしているというのに。

「もういいか。やるぞ。」

ゴリの一言で、全員の目が泉に注がれた。

スタートは皆の居る広場の上に位置する土手の上の舗装された道で、現在泉の立っている所のすぐ横には電信柱が立っている。それ

がいつも使っているスタートの位置の目印だ。

泉が大吾のボードを借りてスタートの準備を終える。ストップウオッチは秀が持ち、合図はゴリが行うことになった。他の皆は邪魔にならないよう土手の下からその様子を見ている。

「行くぞ。」

ゴリの短い確認に泉は頷く。

「用意。」

それを合図に泉の姿勢が低くなる。左足はボードの上。右足は道路をけるためにかかどが浮き、つま先に力が込められる。上半身は力を抜いた状態で構えられた。目線は真っ直ぐ先を見つめている。

「スタート！」

ジャッツ

力強く道路を蹴ると、土手の上をボードが滑り出す。土手の上は平らな為、泉は右足で道路を蹴り続ける。土手を住宅街の方へ下りて右に折れる。すぐに泉の姿は住宅の間に消えた。

秀がストップウォッチを見つめている。

大吾達にできることはただ、祈ることだけだ。

やっと広場に静かな午後が訪れる。誰もが泉の疾走する姿を思い浮かべ、一言も話さずに泉が出てくるであろう住宅街の出口の方を見つめている。

その中で、茜だけがベンチの上で暇そくにランドセルを抱えてで

足をブラブラさせていた。

2分。

まだ泉の姿は見えない。3分以内にゴールするためには遅くとも2分30秒以内には住宅街を出て、土手のストレートのコースに出なくてはならないのだ。

2分10秒。川の音だけが聞こえてくる。

2分20秒。一台のスクーターが通り過ぎる。

2分22秒。皆の目に浜田の青い帽子と大悟の赤いボードが写る。間違いない、泉だ。皆泉から目を離さない。

2分28秒。土手のコースに乗り、一直線でこちらを目指し走行してくる。

（スピードにのってるな。これならもしかして・・・）

手元のストップウォッチを見ながら秀が思う。大悟は居ても立っても居られず、勢い良く土手を駆け上がり、秀に並んだ。無言でストップウォッチを覗き込む。

「秀、カウントしてくれ！」

思わずヤスが叫んだ。目は泉を見つめたままだ。

秀のカウント以外皆に聞こえるものは何もない。

「2分40秒。41、42、43・・・」

皆の眼に映る泉の姿がボードの音と共に大きくなる。皆、内からこみ上げる興奮を抑えられず、知らず内に手に汗握っている。

だが、

「だめだ、間に合わない。」

秀のカウントを聞きながら、小太郎がつぶやく。

すでに45秒を切っているが、ゴールとなるのは土手を降りた皆のいる広場。滑り降りてそこに着くまで10秒はかかる。このままだと、間に合わないのは目に見えていた。

「白崎！！45秒切ったぞ」

大悟が泉に向かって大声で叫ぶ。それが聞こえたのか、泉は皆に分かるか分からないくらい小さく頷いた。その頷きは何を意味しているのか。

泉は土手を下り始める位置まで来ると、勢いに乗ったスピードそのままに左折し、思い切り右足を蹴った。

だが土手にスケートボードのタイヤはついていない。あるのは影だけだ。

誰の口からも声は聞こえない。

皆の視線は上だ。

泉は飛んでいた。

皆が宙を見上げる。

泉は太陽を背にしていた。逆光で泉を見る皆の目が細められる。

空中を飛んでいるのである。土手の上から思いきりジャンプしておよそ3mの距離を飛び越え一気に下まで辿り着く。

着地地点、広場の土の上にタイヤの跡を残し、土煙を上げながら勢いを殺してカーブする。そしてそのままゴールに向かって直進した。

秀のストップウォッチが時を止める。

誰もしゃべらない。

同い年の子供のこれほどのジャンプを見たのは皆初めての経験だった。それほど泉のジャンプは高く、長く、そして美しい弧を描いていた。

「タイムは？」

泉のその声を合図に、止まっていた時が動き出したかのように皆その目を秀に向ける。

秀が手元に目を落とす。その表情からは結果は読み取れない。皆静かにその言葉を待った。

「・・・2分56秒」

秀がタイムを告げると、皆の顔に笑顔が浮かんた。

再び広場が騒がしくなる。それは陽が落ちるまで続いた。

2・健二

「白崎　！！」

学校の廊下到大悟の声が響く。

今は授業間の休憩時間。南小学校、6年生のクラス前の廊下だ。

「大ちゃん。」

そう言って振り返ったのは白崎泉だ。その隣にはいつものように茜が居る。

泉と茜はあの時以来、すっかり親友となっていた。二人は音楽室からの帰りなのだろう。その手にはそれぞれソプラノリコーダーと音楽の教科書が握られている。

「今日の放課後空いてるか？」

「今日？空いてるよ。」

それを聞いて大悟の顔が更に明るくなる。

「よし、じゃあいつもの所に集合な。」

そう言いながら大悟は泉の肩を叩いた。だが、それを見て茜が不機嫌な声で大悟に聞き返す。

「今日もスケボーやるの？」

「茜には関係ないだろ。」

最近、茜はスケボーの話になると機嫌が悪い。そのことに泉はそ

れとなく気付いていたが、大悟は気付かずに無神経にも茜の言葉を跳ね返した。

「分かった。行くよ。」

二人の様子を見て、泉は慌てて返事をした。

「よし。白崎ならそう言うと思ってたんだ。じゃあ、学校終わったらすぐ来いよ！」
「うん。」

その会話を打ち切るように次の授業開始のチャイムが鳴る。

「じゃあな！」

大悟はそのまま廊下を6年1組の教室に向かって走っていった。

茜と泉はそれから無言のまま3組の教室に戻る。自分の席に座って茜の方を見ると、やはり茜は不機嫌な顔をしていた。

茜はまだ本音を言ってくれないが、泉は茜の気持ちは分かっていた。茜は泉が大悟と一緒にスケボーをやることが嫌なのだ。単純に言えば嫉妬である。茜のことを考えれば、大悟たちとスケボーをやることを控えるべきかと思うが、スケボーが大好きな泉にはそれも出来なかった。

泉は幼い頃からずっとスケボーをやってきた。しかし、近所にスケボーをやる子はいないし、しかも泉は女だ。スケボーといえば男がやるものだし、やっても自分よりもずっと年上の人しか居なかった為、スケボーをやるときはいつも一人だった。

友達と一緒に遊ぶには他の子の遊びに合わせねばならず、段々ス

ケボーをやる機会が減っていつていた。

だが、泉はスケボーを辞めなかった。初めて滑った時の爽快感と開放感。泉はスケボーで風を感じるのが大好きだった。泉は他の子供達との遊び以外にも時間を作って一人でスケボーを続けていたのだ。

親の仕事の都合でこちらに越してきたのだが、泉はそれで良かったと思っている。ここには大悟達という仲間がいるからだ。

あの日、大悟が助っ人でスケボーをやってくれと言った時、どれだけ嬉しかったか。それでも人見知りをする泉は、その時素直にその気持ちを話すことができなかった。けど、その後何度も大悟たちに誘われるようになり、すっかり泉も仲間となっていた。

あのコースでのタイムトライアルの他に、障害物越えや、チーム対抗のリレーなどもやった。いつも皆で速さや技術を競い、教えた、教えあったりして自分が上達していくのは泉にとっても仲間達にとっても嬉しいことだった。

リレーでは泉が入れば南小チームは負け無しになり、特に大悟が喜んでいる。最近では西小・南小関係なくチーム別けをして競ったりもしているのだ。

けれど相変わらず、大悟とゴリのライバル心は絶えることなく競っている。

だが、そんな彼らにも変わったことが一つある。それは6年生になって、中学受験のため小太郎が一時辞スケボーをめる事になったのだ。泉が入って6人になったメンバーは再び5人に戻ってしまった。

いつになったら茜は自分に本心を話してくれるのだろうか？泉は最

近よくその事が頭をよぎる。大悟は茜の気持ちには気付いていないし、二人の仲はしばらく変わりそうにない。

黒板を見ている茜を離れた窓側の席から見ながら、泉はそんなことを思っていた。

いつもの公園。泉はいつものように帽子をかぶっている。もちろん、スケボーをやる時の為に買った帽子で、もう浜田の帽子ではない。まだ、ゴリ達には泉の正体を隠したままなのだ。学校も違うし、バレることなく今日に至っている。

だが、ゴリ達にも仲間として認めてもらえるようになってから、泉は自分の正体に嘘をついていることに小さな罪悪感を感じるようになっていた。

しかし、本当のことを言うには抵抗がある。それは今まで嘘をついていたことを皆が許、女である自分と一緒にスケボーをやってくれるかという不安。茜のことを加えて、これが泉の持っている2つの不安であった。

まだ、公園には誰も集まっていない。

「早かったかな？」

そうつぶやくと同時に、大悟たちが来た。

「あれ、白崎早いな。・・あ、あいつらまだ来てないじゃんか。」

大悟は西小メンバーがいないのを見るとそう言った。

「何だよあいつら、自分達から呼び出しといて。」
「あれ、今日はあっちが集まるうって言ったの？」

浜田が慌てて、大悟の後を追いかけている。その後ろにはヤスと強哉もいる。強哉は最近、体調を崩す事も無いようだ。

「お、来きてんな。」

ゴリが西小メンバーを連れてきた。約束の時間に遅れて来たことは少しも気にしていないようだ。いつものように不遜な態度で現れたが、いつものメンバーの他に知らない顔が一人混じっているのに皆すぐに気が付いた。

「おせえよ。」

当然の事ながら、そんなゴリに大悟はいつもの悪態をつく。だが、いつもと違ってゴリは表情を変えずにその悪態に応える。

「しょうがないだろ。今日こそは絶対俺達が勝つからな！」

「へっ？今日は何すんの？」

いきなりなゴリの言葉に思わず強哉が聞き返す。

「あ？言ってなかったっけ？」

「言ってないよ。」

ゴリのボケに突っ込んだのは南小のメンバーではなく秀だった。

「リレーだよ。今日は新しいメンバー連れてきたんだぜ。」

ゴリがそう言うと、皆が一番後ろに立っていた男子を手招きする。皆の後ろから現れたその男子はやけに前髪が長く、ハタから顔をよく見ることができない。見た感じは謎だ。

ゴリが強引にその男子の肩を抱く。

「ふっふっふっ、こいつが俺達西小の秘密兵器だ！もう、こいつがいる限りお前らには負けん。今日は覚悟しろよ！」

「なんだと。」

案の定、大悟が挑発に乗る。というより大悟だけが挑発に乗るといった方が正しいようだ。

そんな二人を他所に他の南小メンバーは気楽にその秘密兵器に話しかける。

「へえ、スケボーできるならもっと早く一緒にやればよかったのに。」

フレンドリーな浜田が真っ先に話しかける。

「俺、今日西小に転向してきたんだ。」

「へえ、転校生なんだ。白崎と一緒にだね。」

そう言っつて浜田は泉を指し示す。秘密兵器が泉の方を向いた。泉は帽子に目を隠しているため、目を合わせることはなかったが、その秘密兵器と仲良くなるべきかどうか迷っていた。

仲良くなつても仲間が増えるたびに自分の中の不安が増えるだけではないのかと。

昔は欲しくてしょうがなかった仲間が、今泉を不安にからせてい

る。だが、泉はそこを抜けられない。孤独を知っているからだ。夢のために孤独を選ぶことは、まだ11歳の泉にとってはとても辛い選択だった。それ故に、不安から身動きが取れないでいた。

泉は秘密兵器に向かって歩き、一言声をかける。

「南小、6年の白崎。よろしく。」

「俺は葛西健二。」

「健二って言うのか。健二はいつからスケボーやってるんだ。」

「小2。」

仲間達が、まだ言い争っているゴリと大悟を尻目に健二を中心として会話を始める。その会話の輪の中にいながら、泉はどこか外側に居るような疎外感を感じていた。それは自分から作った疎外感だった。

白崎を一人の仲間が見ていた。その少年は知っていた。白崎が感じている疎外感、仲間に入っているようで入っていない状態。なぜ白崎がそう感じているのかの原因。気付いているけど、立场上それを言うわけにはいかないのだ。白崎を見ているその彼は、最近特に白崎を良く見ていた。

「いいか、今日は絶対負けるわけにはいかないからな。」

やっとゴリとの口喧嘩を終えて、興奮冷めやらぬ大悟が南小メンバーにそう言った。今日の勝負は南小、西小で分かれてのリレー。リレーの順番は、大悟、強哉、浜田、ヤス、泉。対して西小はゴリ、ホリー、浩太、秀、健二だ。

「特に、白崎。お前はあの西小秘密兵器と直接対決だからな。絶対

抜かれんなよ！俺達は白崎の為になるべく差をつけて白崎にバトンタッチするんだ。」

「はい。」

いつものように大悟はゴリにのせられて熱い指導をするが、他メンバーは淡々としてる。

「いつまで作戦会議してんだよ。始めるぞ。」

ゴリが早くやろうと言わんばかりに野次をふっかける。だが、西小側の表情を見れば分かるように、向こうでもやはり熱くなっているのはゴリだけのようだ。

「分かってるよ。」

大悟が言い返すと同時に、皆自分の位置につくために移動した。

勝負の方法はいつもと同じ5人のリレー方式。コースはスタートの位置から一人目が人気のない住宅街に入る。長い上り坂を上げると二人目に交代し、真っ直ぐ伸びた道を西に走る。そこから舗装されていない土むき出しのでこぼこ道を通り、抜けた所で三人目に交代する。三人目は住宅街の中にある小さな公園まで行き、公園の中のベンチなどの障害物を越えて小さな坂を下りる。四人目は三人目が坂を降りたところで交代し、住宅街の二画一画をギザギザに走行する。大通りに出たところで五人目に交代し、大通りから河原に向かって真っ直ぐに伸びた下り坂を一気に走行し、川原に突き当たった所で、再び川原の中の広場に向かって土手を走行する。そして先に元の広場に着いた方が勝ちである。

公園には一番手の大悟・ゴリと、健二が入ったため余りになった西小の広が審判として残る。

広の合図と共に、二人がスタートした。

「ねえ、それ前見えてんの？」

泉と共に五番手のスタート地点である大きな下り坂に向かって歩いていた健二が、突然そう言った。

「人のこと言えるの？」

泉は冷静に健二の前髪を指して言う。

「俺は見えてるよ。」

「へえ、そう。」

この話題を早く打ち切りたい泉はそっけなく会話を終わらせる。

「あ、ここ。」

いつもの位置に二人が着く。

「そういえば、あの中で誰が一番早いの？」

「・・・タイムで言うと、自分かな。」

「ふーん。じゃあ負けられないな。」

今まで何を考えているのか分からず、ひょうひょうとしていた健

二が初めてはつきりとした感情を見せる。健二も年頃の男の子らしく負けず嫌いな部分を持つているらしい。

「健二は前どこに住んでたの？」

「東京。」

「東京は、スケボーやってる奴っていっぱいいるの？」

二人はいつでもスタートできるように道に並んで会話を交わす。

「やってる奴なら結構見かけるけど、同い年では全然いなかったな。」

「そうなんだ。」

どことはなしに前を向いたまま泉は答えた。健二は泉を見ながら言う。

「そういえば、お前・・・白崎も転校して来たんだっけ？」

「うん。前は千葉にいた。」

「スケボーしたい時ってどうしてた？」

「一人で公園行ってやってた。」

「やっぱり？俺もそう。ここみたいに小学生でスケボーやってる奴がこんなにいるのって珍しいよな。」

「うん。」

「ま、俺達みたいな奴にとってはありがたいけどな。」

「うん。」

泉は心からその意見に賛同した。やはり仲間がいるのは嬉しい。

「ここに来て良かった。」

初めて、泉はその言葉を口にした。ずっと心で思っていた言葉。健二なら同じように思っているのではないかと思ったから。

「そうだな。」

泉の予想通りの言葉が返ってきた。泉の予想と違っていたのは、その言葉が、こんなにも自分を喜ばせたということだ。

泉の心は嬉しくて泣き出してしまいそうな気持ちと、早く健二と走ってみたいという気持ちでいっぱいだった。今まで感じていた孤独感はどこにも姿を見せない。

だが、それと同時に湧き上がる小さな罪悪感には気付かないフリをした。

「あれ？」

健二が突然声を上げる。健二は曲がり角の先の下り坂を見ていた。

「何？」

「俺達はこの坂を下ってくんだよなあ？」

「そうだよ。」

コースはすでにゴリが説明している筈だ。

「でもこの道工事中になってるぜ。」

「えっ？」

健二に言われるまま、角を曲がって下り坂の先を見てみると、確かに工事をしていた。水道工事のようだ。道には工事の車と進入禁止の看板が立てられ、これではこの道を使うことは出来ない。

「他に道ないの？」

「その一つ先の角を曲がって下れば行けると思っけど。」

「じゃあそっちに変更だな。」

そう言うのと、すぐにスケボーの音が後ろから聞こえてきた。二人が同時に振り返ると4番手のヤスと秀がこちらに向かっているのが見える。二人の間にそれほど差はないが、秀が1メートルほどリードしていた。

「来たな。」

健二が嬉しそうな声で二人を出迎える。言葉には出さなかったが、わくわくしているのは泉も同じだった。

「行け！」

秀はそう言うって健二に向かって手を伸ばしバトンタッチする。同時に健二は右足を蹴って飛び出した。

それを横目に泉は手を伸ばしたままヤスを待つ。少し遅れてヤスが泉にバトンタッチした。

「悪い！まかせた！」

「まかされた！」

短くヤスの言葉に答えると、泉も先に行く健二を追って飛び出した。目は真っ直ぐに健二の背中を見つめている。だが、健二がここで滑るのは初めてだ。それを考えれば、泉が追いつく隙もある。

いつものコースを通り過ぎて、目的の一つ先の角を曲がる。そこにはひとつ前の道と同じように下り坂がある、筈だった。

健二に追いつこうと、泉は少しもスピードを緩めずに角を曲がった。

だが、その先にあったのは坂道ではない。階段だ。

「えっ！」

思わず泉は驚愕の呻きをもらす。だが、泉よりも先を行っている健二を見て、さらに驚くことになる。

健二は階段の部分と石造りの垣根の壁の間にある排水用の溝にボードの左側のタイヤを乗せ、外壁の部分に右側の2つのタイヤを乗せて、ボードが斜めの状態で器用にそこを降りているのだ。

（私にあればできない。）

一瞬の迷いを捨て去り、泉は覚悟を決める。

健二は泉がどうやってこの階段を切り抜けるのか気になり、階段を降りきった時に後ろを一瞬振り向いた。

その目が驚愕に開かれる。

泉は階段をジャンプして一気に下りようとしていた。その体は階段の上を通り過ぎ、そのまま下へ下降する。

（無茶だ。あのままじゃ、壁にぶつかる！）

階段を下りた4 m先は外壁がある。ジャンプし、無事着地してもこれだけの距離では失速しきれず壁に衝突してしまうのは誰の目にも明らかだ。

「おい・・・」

思わず健二は止まって声を出す。だが、その目の前で健二の予想外のことが起きた。いや、予想外の事を泉が起こした。

泉のボードが前輪から着地する。惰性だが、ボードはすさまじい勢いで壁へ向かって吸い込まれていく。だが、壁へ衝突する寸前、泉は後輪に体重をかけて無理やりタイヤを止め、前輪を浮かせて体ごと右を向かせることによって、ボードはけたたましい音を立てて方向を90度転換した。しかし、それでも勢いを殺せず、ボードは壁に対して水平になったまま、壁へとぶつかりそうになる。

鈍い音が一回聞こえた。

それがなんだったのか、分かったのは事が起こった後だ。外壁についた靴跡と上げられた左足によってその結果を知る。泉は衝突しそつになった外壁を足で蹴って、その衝突を逃れたのだ。見事に方向転換し、階段を無事に下りた泉は、止まって泉を見ていた健二を一瞬の内に抜き去っていく。

目に飛び込んできたのは会心の笑顔。それを見て、健二は我に返る。

「やられた！」

そう言った言葉とは裏腹に健二の顔には嬉しそうな、楽しそうな、無邪気な笑顔が現れていた。

土手の上の最後の直線。泉の前には健二がいる。

階段を越え、その後の下り坂までは泉が先行していた。しかし、広場へ戻る土手の上の平坦な直線コース。そこで泉は健二に抜かれてしまったのだ。何の障害のない直線ではあまり個人差は出ないため、そこで抜くことは難しい。しかし、それを健二はやってのけた。

後、二人に残されているのはゴールのある広場へ土手を降りるだけ。この直線で抜けない以上、泉が健二を抜くチャンスは無い。だが、泉は健二にこれ以上はなされまいと必死にくらいつきながらも、健二を抜くチャンスはないか頭をフル回転させていた。

「おい！来たぞ！」

浩太の声に皆が一斉に反応する。

「健二が前だ！」

ゴリの嬉しそうな声が皆の耳に届く。それとは対照的に、大悟の表情は厳しい。

健二の2mほど後ろに泉は居た。健二と泉の場所からも、広場のゴール前に皆がいるのが見えた。途中、二人の横を自転車を通り過ぎたが、二人を減速させるには役不足だ。ぶつかったならばお互いに転倒しかねないそのスピードに、自転車の主は通り過ぎた瞬間、手に汗握ったことだろう。現に自転車を止め、驚いた顔で止まらない二人を見ている。

ゴールまで後8m。さらに、泉の足に力が入る。

皆の声が二人の元に届き始めていた。だんだんと声が大きくなり、それが応援だと気づいた時には両者を応援する声が次々と押し寄せてくる。その中に怒号にも似た大悟とゴリの声が混じっているのに気付いて、泉は思わず噴出しそうになった。

後、5メートル。

健二が振り返って泉の位置を確認する。すでに二人の差は1メートルほどに迫っていた。

4メートル。

泉は勝負を仕掛けることを決意する。残されたコースで泉にできることはただ一つ。

3メートル。

後は広場前までの河原の芝を下るだけ。健二がボードを右へ方向転換し、その下りに入る。下りによってボードは下がっていくが、芝生によってその勢いを殺されながら真っ直ぐに健二はその距離を消化していく。

健二が土手を2mほど降りたところで、泉も土手へ向かって方向転換する。だが、泉は少し下がった。

「まさか、あいつ……。」

泉の様子を見て、秀の口から呟きが漏れる。

泉の先に行く健二の頭上に影がさした。

泉だ。

泉はそこでジャンプした。一年前に見せたジャンプと同じものだ

った。

健二とは対照的に、一気に最後の3メートルを縮めていく。

健二が土手の坂を下り切り、泉が着地する。そこから最後の加速をかけて、二人はゴールへと疾走した。

ストップウォッチを持っている広の手が、時を止めるボタンを押すために大きく下に向かって振られる。

二人の荒い呼吸だけが聞こえる中で、健二が勝敗の結果を求めた。

「・・・ど・・・どっちだった？」

広はストップウォッチを持った手をゆっくりと持ち上げ、その数字を読み上げた。

「8分23秒。同時だった。」

それを聞いてぐったりと二人の力が抜ける。健二は芝の上に仰向けになり、泉は思わず座り込む。

「なあーんだ・・・」

その気の抜けた泉の言葉を合図にしたように、緊張の面持ちだった皆の顔が崩れ、笑い出す。

それにつられて健二がひときわ大きく笑い、泉も、下を向いて小さく笑った。

それから、健二は正式に大悟たちの仲間に入り、幾度も一緒に滑ったり、戦ったり、争いながら過ごしていた。その間も泉の正体はバレることなく、また健二の素顔をまともに見た者はいなかった。

だが、そんなことを気にならないような楽しい毎日。その日々を重ねれば重ねるほど、泉の罪悪感はずっずっ降り積もる雪のように重くなっていった。

3・茜

「泉ちゃんはこのままでいいの？」

いきなりの質問に言葉が出ない。

校舎裏の日陰のベンチに座った泉と茜の手には、スケッチブックと鉛筆が握られている。現在、二人のクラスは美術の授業中。絵のテーマは学校。6月とは言え、直射日光はもう暑い。二人は校内の涼しいポイントを見つけてスケッチをしている所だった。

「なんのこと？」

質問の意味を予想しつつも、それが顔に現れないように気をつけながら、泉は気付かないフリをして訊き返した。

「大ちゃん達のこと。男の子だって、嘘ついたままでいいの？」
「・・・・・・・・・・」

泉は校舎を描いていた手を止める。茜の顔を見ることができず、目線はスケッチブックに落としたままだ。

どうしてそんなことを聞くんだろう。

どうして今なんだろう。

どうして

茜に対する疑問が次々と浮かんでは消えていく。泉の心の中に言いようのない不安がゆっくりと広がる。それとは対照的に、鼓動はどんどんと速まっていった。暖かくなっていく気温とは関係なく、

汗が泉の手のひらをじつとりと湿らせる。

「茜ちゃんは……。」

口に出したが一旦言葉が詰まる。すぐに口にしたことを後悔したが、外に出してしまつた以上、そのまま何言わない訳にはいかなかった。一度出かけた言葉は形を変えて隣の親友へと投げかけられる。

「茜ちゃんはどうした方がいいと思う？」

「……あたしは、辞めた方がいいと思う。」

一呼吸置いた後、茜もスケッチブックから目を離さずに泉の言葉に答えた。

泉は不安の為か、恐怖の為か、体は金縛りにあつたように動かなくなる。茜の表情を見るのが恐かつたのかもしれない。体の奥から冷えていくような感覚に襲われた。だが、何とか言葉を吐き出す。

「どつちを？」

その言葉を受けて、弾けた様に茜が泉の方を向く。その顔に葉明らかな動揺が見える。だが、スケッチブックの上の未完成の校舎を見つめている泉はそのことには気付かない。茜の声を聞くまでは。

「……う、……嘘をつくことですよ？」

しばらく間をあけた後、茜はそう言つて、気まずそうにまたスケッチブックに視線を戻した。

「うん。そうだね。」

沈黙は二人に一体どんな答えを与えるのか。お互いにそれを知ることができない。

泉には茜の言いたい事は分かっている。茜が望んでいるのは泉が大悟の仲間から外れること。その理由は茜の大悟への想いにある。それを否定するつもりはないし、応援しているつもりだ。

不安定な少女の心は、他の女の子が好きな人のそばに居るという状況を受け入れられる程、余裕のあるものではない。例えそれが応援してくれている友達でも。特に茜はずっと昔から想いを抱えてきたのだから。

泉はずっとこの二択を迫られていた気がする。どちらも失いたくない想いが、答えを出すのをずっと先延ばしにしてきた。けど、とうとう逃げられないところまで来てしまった。茜が大吾か。親友か。スケボーか。どちらかを必ず選ばなければならない事に泉の心は沈んでいる。何より茜が今まで触れようとしなかった答えを自分から求めているのだ。今度は避けることはできそうにない。

そのまま就業のベルが鳴るまで、二人は何も言わずに校舎のスケッチを続けた。湿気を含んだ風が二人の間を流れていく。梅雨の訪れを予感させるその風は、二人の沈黙を誤魔化すように木々を揺らして音を立てた。

学校からの帰り道。泉が歩いている場所は大悟達とリレーをやる時に使用するコースの近くだ。いつもこの道は下校の時には通らな

い。そしていつもと違う所はそれだけではない。下校の時は一緒に茜の姿は、今彼女の隣にはなかった。

あの時から茜と気まづくなってしまった泉は、普段、皆が下校に使わない道を選んで歩いていた。それは茜と下校中に会いたくないことの表れだった。

泉は自分の足を見ながら、おぼつかない足取りで人気の無い道を歩いている。

（私は、辞めたくない。でも、辞めなければ茜ちゃんはずっと嫌な思いをする。何で、好きなことをやることがいけないんだろう。私が大ちゃん達とスケボーを続けたら、茜はなんて言うかな？絶交されるかな？）

何度考えても一人では答えの出ない問題だ。けれど、

（辞めたくないよ・・・）

泉は小学校六年生。だが、普通の小学六年生よりも大人の部分を持っていた。大人の泉は茜のことを考えて、もうスケボーは辞めた方が良くも思っている。だが、歳相応の子供の部分は好きなことをやり続けたいと思っている。

いつでも大人が正しいとは限らない。だが、他人の事を考えられるのが大人だ。子供は自分の要求に対して素直だが、それだけを貫けるほど泉は子供ではない。けれど自分の思いを人の為に殺せるほど大人でもない。泉はその狭間で苦しんでいた。

家に帰る為には遠回りになるこの道の、いつもと違う景色を楽しむこともなく泉は歩き続ける。

だがそれが、偶然を呼ぶ事となった。

「白崎？」

聞いたことのある声が泉の後ろからかけられる。だが、泉は振り返ることができなかった。それは、聞いたことがあるからこそ拒否しなければならなかった。

振り返ってはいけない、と。

「ごめん。俺知ってるんだ。白崎だろ？」

その言葉に驚きを隠せない。

心臓は鼓動を速め、金縛りのように動けなくなる。まるで自分のものではなくなったかのように動かない体を、泉は動揺した顔のままゆっくりと後ろに向けた。

そこに立っていたのは、秀だ。

今の泉はもちろん秀達といつも会っていた格好ではない。普段の学校の帰り。スカートに赤いランドセル。どう見ても女の子にしか見えない格好をしているのだ。それなのに、秀は泉に呼びかけた。そしてさっきの言葉。

それが一体何を意味しているのが、泉は考えたくなかった。

その内心は沈黙となって現れる。

「やっぱりそうだ。」

秀は少しだけ微笑んだ。

いつもと同じ秀の様子に、なぜか泣きそうなる。

いつの間にか泉は不安を口にしていた。

「・・・皆は？皆知っているの？」

その時、泉の中に在ったのは何だったのだろうか。その時の表情はまるで見えない恐怖を感じているようだった。少なくとも、秀はそう感じた。

だから、

「皆は知らないよ。気付いたのは俺だけ。・・・ごめん。」

謝る事しかできなかった。

「ちょっと、話がしたいんだけどいいかな？」

リレーで第3走者が使用する障害物がメインの小さな公園。そこにあるブランコに二人は座っている。だがいつも子供達を楽しませているその遊具は、今は動いてはいない。元々ここは利用者の少ない公園だ。だからいつもリレーで使われているのだが、今二人の他には誰も居ない。

「いつから気付いてたの？」

どこかうつろな表情で泉は左隣にいる秀に話しかけた。声は心なしか小さく、その目は足元を見つめている。

秀は少し躊躇った後、答えた。

「白崎が初めて俺達の所に来た時。白崎がタイムトライアルしただろ？」

「初めから気付いてたの？」

意外な答えに泉は驚きを隠せないまま、顔を上げて秀を見る。まさかそんな早くからバレていたとは思ってもみなかった。

「うん。ゴール直前の白崎のジャンプの時、俺土手の坂の所に座ってたんだ。下から白崎を見上げて、その時顔が見えた。」

「皆には言わないで！」

思わず泉は立ち上がり、叫んでいた。その勢いで、ブランコが音を立てて揺れる。

今にも泣きそうな顔を見て、秀は言葉を失った。泉を見つめる秀の目は段々と怪訝なものになる。

「どうして？」

「だって・・・。」

秀は泉と目を離さぬまま、確認するようにゆっくりと言葉を紡いだ。

「俺は、俺は白崎が最近悩んでることも知ってるよ。茜ちゃんの事だろ？」

「・・・。」

泉は言葉が出てこない。秀の言葉を肯定することは、何だか茜を裏切ることになるような気がした。

「茜ちゃんが大悟のことを好きなのは多分、皆知ってるよ。ゴリは

知らないだろうけど。茜ちゃんは分かりやすいからね。茜ちゃんはどう思っているか俺には分からないけど、俺は皆に本当のことを言うべきだと思う。白崎が女だと知ったって、皆は今更怒ったりはしないよ。」

「違うの。そうじゃないの……。」

泉はさすがのような目で秀を見る。その目は媚びる為ではなく、秀への苦しいほどの嘆願が込められていた。

「あたしが、皆に、言って……。それで皆が私を許してくれたとしても、茜ちゃんは……。あたしは、茜ちゃんが大事な。茜ちゃんが、もし……。もし望むんだったら、あたしは……。」

泉は秀の誘惑から逃れるように硬く目を閉じる

「皆と一緒に居るの、辞めてもいいと思ってる。」

それを聞いて秀の表情が変わった。同時に秀もブランコから立ち上がる。

秀の口調が少し責めるようなものになった。

「本当にそう思っているの？」

返事の代わりに泉は小さく頷いた。

「そう……。それもアリだとは思っけど……。」

秀はじつと泉を見る。今日の泉の表情は秀にとって初めて見るものばかりだ。けど、それは当たり前的事だった。今まで、帽子の下に隠れた白崎の顔を見た者は誰も居ないのだから。

秀は泉から一度視線を外して一つ溜息をつき、しばらく目を閉じて、再び泉の顔を見た。だが、泉は苦しそうに瞼を下ろしていた。

「分かったよ。でも、俺は白崎とこれからもスケボーをやりたい。それは俺だけじゃなくて皆も同じだ。」

秀はそれを言うことで泉が困るのは分かっていたが、それでも口にした。自分の願いを込めて。

その言葉は泉の心に深く染み渡ったが、泉の心を軽くしてくれるものではなかった。

泉は瞼を開いて、苦しみに満ちた瞳で秀を見る。

「ごめん。」

もう、秀は謝ることしかできなかった。

泉は小さく首を横に振る。

「帰るね。」

やっと聞こえるくらいの小さな声で別れの言葉を言って、泉は公園を後にした。

泉の姿が見えなくなるまで、秀はずっとその後姿を見つめていた。泉が見えなくなると、ゆっくりと再びブランコに腰を下ろした。

（やっと会えたのに・・・）

待ち人に会えた喜びよりも、自分が責めてしまったのかもしれないという不安が残る。何かしてあげたいけど、何もできないことに気付く。

秀もブランコから降り、公園の出口に向かって歩き出した。

「は？なんで？」

「ごめん、用事があつて。」

いつもの学校の廊下。いつもの休み時間。そしていつもの大悟の誘い。いつもと違うのは、それを泉が断ったことだった。

「そつか。じゃあ、しょうがねえな。」

大して気にした様子もなく、大悟は自分の教室に戻っていく。

泉の隣には、驚きと罪悪感を湛えた茜の顔があつた。

「ねえ、泉ちゃん。今の・・・。」

泉は茜の顔を見て、笑いながら言った。

「ほんとに用事があるの。」

その表情と言葉に、茜は安堵した。心から。

「そうなんだ。」

茜も笑顔を見せる。いつも見ていた茜の笑顔だが、何だか久しぶりに見るような気がした。茜の笑顔を見て、泉は自分の選択が正しかったことを確認する。

（もう、大丈夫・・・。）

心の奥に置き去りにした想いを無視して、泉は笑った。

部屋は静かだ。

いつもなら大吾達と河原の広場にいる頃だが、泉は自分の部屋のベッドの上で仰向けになっていた。

（暇だなあ。）

今更ながら、一人では何もする事が無いのに気付く。

茜はいつもこの時間何してるんだろう。今頃、学校の友達と一緒に遊んでいるのだろうか。今まで、他の女の子達が何をしてるのかわなくて気にしたこともなかった。これから放課後遊ぶのだとしたら、女の子達と遊ぶことになる。だが、いつも一緒に遊んでいない泉を誘ってくれる子はいない。

何だが、一人だけ取り残された気分だ。

天井を見つめていた目が、部屋の一角で止まる。そこには、いつも使っている緑色のボードが壁に立てかけてあった。

何だかいたたまれなくなって、泉はベッドから降りる。ボードの所まで行くと、見えないようにそれを押入れの中にしまった。

そのまま、ランドセルを持ち上げて、ペンケースと今日出た宿題

を取り出す。それを勉強机の上にひろげて椅子に座った。
何かをしていなければ、スケボーのことばかり考えてしまう。それを避ける為だった。

「えっ、来ないの？」

大悟の言葉に、健二が答える。

「なんか、用事があるんだってよ。」

「なんだ。つまんねえな。」

健二はすねるようにそう言った。ここにいる誰もが、泉がここに居ない事に何の疑いも抱いていない。きっと、明日になればまた一緒にスケボーができると思っている筈だ。

秀以外は。

秀は大悟の言葉を聞いて、やはりと思う。それを顔に出しはしないが、嫌な感情が広がる。

それは悲しみだろうか、寂しさだろうか。それとも、悔しさだろうか。

多分その全てだろう。

泉が抱えているものへの悲しさ、泉が居ない事への寂しさ、そして、それを知っていながらも何もできない自分への悔しさ。

（何かしたい。）

自分の周りで楽しそうに話す仲間を目の前に、秀は悩んでいた。だが、誰にもこの事を話すことはできない。泉の為に、茜の為に、自分の為に。

（何かしたい。）

その答えはきつと仲間の誰も持つてはいないだろう。だからこそ、秀は悩むのだ。

秀は空を仰いだ。

まるで、そこに求めている答えが書いているかのように。

「どうしたの？」

上を見上げたままの秀に気付いて、浜田が声をかけてくる。その声に、秀は視線を下に戻した。

「いや、いい天気だな、と思って。」

「そうだね。」

浜田は太陽の光が眩しそうに、空を見上げる。つられるように秀も再び上を見上げた。だが、見ているものは違う筈だ。

「おーい。今日は何する？」

大悟の声が広場に響く。皆の笑い声も。

この声が、泉に届けば良い。

そう、秀は思っていた。

4・秀

泉がボードに触らなくなつて2週間が過ぎた。今では放課後クラスメイトの女の子達と遊ぶようになっていた。

少しずつ、変わっていく。

段々と、泉も茜もスケートボードのことは口にしなくなっていた。毎日のように誘いに来ていた大悟も、

『女の子達と遊びたいの。』

泉がそう言つと、諦めてくれた。最近では泉を誘いには来ない。寂しかったが、いつも悩んでいた毎日に比べ、安定した日々が続く。茜がどう思っているかは分からないが、もう、聞こうとも思わない。後悔はしていない。

相談したわけではないが、茜と泉は下校する時、あの土手の上を通らなくなっていた。それが茜も気にしているという証拠だった。

終業のチャイムが鳴り響く。

先生に挨拶をし、ランドセルを背負おうとして泉は放課後に委員会があることを思い出した。ランドセルを再び机の上に置いて、茜の元に行った。

「茜ちゃん。今日委員会あるから、先に帰ってていいよ。」

「うん、分かった。バイバイ。」

「バイバイ。」

二人は互いに手を振って別れる。ランドセルからペンケースを出し、同じ委員の男子と委員会が開かれる教室へと向かう。

その教室のドアをくぐり、自分のクラスの席についた。その時、初めて気付く。

浜田が、同じ委員なのだ。

泉は6年3組。浜田は大悟と同じ1組。クラスが離れているおかげで隣の席に着くようなことはなかったが、泉は自分の中の気まぐさを誤魔化せず、表情が硬くなる。

一方浜田は泉を見ると、以前と同じ笑顔で泉に声をかけてきた。

「何だか久しぶりだね。」

全く変わらない浜田の様子に安堵しつつ、泉は笑顔を浮かべた。

「そうだね。」

後ろめたさが背中に張り付くように離れない。浜田がいつものように接してくれることが、余計にそれを大きくしていた。これ以上浜田と何を話せばいいのか分からず、目を逸らす。

その時、先生が教室に入ってきて教室が静かになる。そのまま委員会が始まった。それに救われたように泉は配られたプリントに目を落とした。

（私は、悪い事しているのかな）

何もかもが嫌になる。

少し前までは、なんともなかった時間が苦痛になる。

(何でこうなっちゃったんだろう)

後悔はしてない。きつとしてない。

泉は委員会の間、ずっと下を向いていた。

「何だ。また白崎はいないんだ。」

健二が漏らした呟きに、西小のメンバーは疑問の視線を大悟に投げかける。それに気付いた大悟は苛ただしげに健二から目を逸らした。

「あいつも受験なのか？」

何気なく聞いたゴリに、大悟はにべもなく答えた。

「ちげえよ。」

「じゃあ、どうしたんだよ。」

質問を重ねるゴリを、まるで自分のイラツきの原因であるかのよう
に睨む。

「俺が知るか。」

そう言うと、大悟は皆の周りから外れて土手に座った。

「どうしたんだアイツ？」

浩太が浜田の隣に歩いて来ながら質問した。大悟とゴリの喧嘩はいつものことだが、今日はいつもの喧嘩とは違う。それは仲間の誰の目から見ても明らかだ。

「白崎のことは僕らにも分からないんだよ。分からないから、イラついてんじゃない？」

「分からないって、会ってないのか？」

「会っただけど、話したくなさそうなんだよ。」

「へえ。反抗期か？」

「なんだよ、それ。」

変な冗談を言いながらも、二人の顔は晴れない。それは他の皆も同じだ。

「今日はどうする？」

秀が、納得行かない顔で黙っていたゴリに尋ねた。

「さあな。」

こちらと目を合わせようとしないライバルを見つめながら、どうでもいいと言わんばかりに西小リーダーは答えた。

（話をしに行きたいけど・・・）

秀は川べりの方へ行って座る。ゆっくりと流れる川に日光が反射してまぶしい。ずっと遠くの空を見れば、厚い雲が空の端を覆っている。

（もうすぐ梅雨だな・・・）

そんなことをポツリと思う。梅雨に入ればこうやって皆でここに集まることもなかなかできなくなる。

雨の降る時間の間に、白崎の問題が解決してくれればいい。時間による解決なんて曖昧なものを頼るのは、何も出来ない大人の言い訳だと思ってた。

結局、俺もその中の一人だ。

何もできない自分。

自分は子供だから何もできないのだろうか。

自分は無力だから何もできないのだろうか。

自分は何もできない。

自分は何もしてやれない。

仲間に、

友達に、

好きな人にさえ。

5・大吾

降り続く雨が人々の心を憂鬱にさせるのは、その音のせいだろうか。厚い雨雲によって太陽の光を遮られた薄暗い空間のせいだろうか。湿気のせいでじめじめした空気のせいだろうか。それとも、雨の冷たさのせいだろうか。

外出を邪魔され、室内で遊ぶしかない子供達の多くは、家でTVゲームに夢中になっているのだろう。

もしくは一人自分の部屋で、本を読んでいるのかもしれない。

泉のように。

泉にとってこの雨は、放課後に皆と遊ばない為の都合の良い言い訳となっている。その手にはもう何度も繰り返し呼んだコミック本が握られていた。

彼女は前に進む痛みよりも、その場に留まる仮初めの安息を選んでいた。

確かに留まれば何の苦しみも悩みもない。だが、一つも解決されずに苦しみも悩みも一緒に留まっていく。それは誰もがこれから学んでいかなければならないことだった。他の誰でもない。自身の経験によって。

ベッドに座ったまま、泉はずっとコミックを読みふけている。他の世界に逃れることはたやすい。だが、それもすぐに終わってしまう。

皆と会わないことに安堵はあるが、例に漏れず、泉の気分も明るいとはいえない。元々の悩みに、梅雨が拍車をかけているのかもしれない。

れなかった。

コミックを閉じ、投げ出して、そのままベッドの上に仰向けになる。

段々と、一つの欲求が頭の中を支配していく。大悟達と一緒に遊べないことよりも、茜が本当の気持ちを話してくれないことよりも、もっと純粹で、幼い頃から持ち続けていた欲望。

たった一人ですつと。

泉は今、一人だ。

昔と同じように。

南小に転校する前の、あの頃のように。

（そうだ。）

泉は天井をじつと見詰める。

（あの頃に戻っただけだ。）

その目が、天井から離れていく。

（私は）

泉は起き上がった。

（ずっと）

立ち上がってクローゼットの方に行く。

（スケボーがやりたかったただけなんだ。）

泉は部屋を出た。

灯りが消され、誰もいなくなった暗い部屋ではクローゼットの中に隠しておいた泉の緑色のボードは無くなっている。いつも、壁のフックの上にかかっていた帽子も。

朝から降り続ける雨の中、秀はいつもの土手を歩いていた。

今は浜田の家からTVゲームをして遊んだ帰りだ。時間はすでに夕方の方の5時を回っている。秀の家は浜田の家からは友達の中で一番遠い。友達とは別れた後なので、一人でこの道を歩いている。

この間までは穏やかだった見慣れた川も雨で増水し、水は濁って勢いが増している。まるで別の川のようなようだ。雨のカーテンのせいで今日は川の向こう側ははっきりとは見えない。雨音と川の音が世界を支配する。

視界も聴覚も雨で一杯になり、狭い空間に閉じ込められたような感覚に陥る。

激しい雨のせいで、傘をさしていても靴の中まで濡れている。歩く度に不快な感覚が足に伝わった。

ふいに、雨の世界を突き破って聞こえる音があった。

音のする方を見ると、薄暗い視界の中、いつもの広場で何かが動

くのが見える。それは、秀が見慣れた動きをしていた。
それは、その誰かはスケートボードをやっているのだ。

（雨なのに、誰だ？）

歩く速度を変えずに、秀はそれが自分の知っている者かもしれないと、その人物の居る方を見ながら進んだ。

そのシルエットが段々とはっきりしてくる。少年だ。

帽子をかぶっている。

ボードの色は緑。

秀は立ち止まった。その人物が誰であるか分かったからだ。顔ははつきりとは見えないが分かる。それは、何度も見たことのある姿だった。

秀はそこから一気に土手を駆け下りた。濡れているせいで土手の下りは滑りやすく、秀は何度か転びそうになるが、勢いを緩めることなくその人物の下へ走った。

その人物は秀に気付いていない。

その人物と秀の距離は3〜4 mほどしかないが、雨によって遮られた空間はまるで別世界のように二人の間に横たわっている。

秀はスケートボードを邪魔しない位置で立ち止まり、その人物をずっと見ていた。

どのくらい時間が経っただろうか。

その人物が滑るのを止め、振り返った。

秀に気付く。

目が合った瞬間、秀は反射的にその人物の方に歩き出していた。

「・・・秀ちゃん。」

「風邪ひくよ。」

言つて、秀は傘を差し出す。それはごく当たり前の、自然な行為だった。ずっと聞きたかった言葉より先に出ていた。

傘の中に入れてやると、二人の間の距離が一気に縮まった気がした。

傘の中という狭い空間。今度は雨が、二人と外界との間を遮断する。

秀は泉の顔を見てる。だが、泉は下を見ていた。

二人の沈黙を二つの水音が埋め尽くす。

しばらくして、ゆっくりと泉が顔を上げ、雨音に隠れてしまいそうな小さな声で話し始めた。

「あたし・・・。」

秀は泉の言葉を待っている。しかし泉は、耐え切れないようにまたすぐに視線を下に落とした。

「あたし、スケボーがしたいの・・・。」

「うん。」

「もう、皆と一緒になくていい。一人でも・・・いい・・・の。」

泉から、嗚咽のような声が漏れる。それと混じって、言葉が聞きづらくなっていく。

一つも言葉を聞き逃さないようにするかのように、秀はじっと耳

を傾けていた。しばらくして、泉の口から泣き声だけが聞こえるようになる。

もう、秀の耳に届くのは雨の音と泣き声だけだ。

薄暗い空は夜の訪れと共に、段々と空気を暗く染めていく。数少ない川沿いの街頭は二人を光にさらすのを恐れているかのように、二人の所には届かない。

どのくらい、そうしていただろうか。

二人は並んでゆつくりとした足取りで帰路に着く。

二人の間に、言葉はない。

言いたかった。

言えなかった。

でも、その前に解決しなきゃいけないことがある。

俺が解決するわけじゃない。俺が解決したんじゃ意味がない。

けど、放っておく事はできない。

それが解決した時、言おう。

そうすればきっと解決するはずだ。

それとは違う問題が。

俺の中で。

言えば必ず良い結果になるとは限らない。それが分からないほど、

俺は子供じゃない。

でも、白崎なら

悪くなる筈はないと思うから。

今を壊すことはないと思うから。

思うけど、怖い。

一人でも大丈夫。

それが分かって嬉しかった。

だからもういい。

一人でもやりたいことはやろうと思えば出来るから。

だからもういい。

このままで。

翌日も雨。 出かけに見てきた天気予報によれば、今週いっぱい
雨らしい。今日は水曜だから、予報通りであれば後3日は雨が
続くということだ。これでは、誰だって気が滅入ってしまう
だろう。

靴は雨のせいで濡れて足は冷たいが、湿気のたつぷり詰まった
空気のせいで蒸し暑い。絶え間なく落ちてくる雨が空間を埋めて、
何だか息苦しいような感じさえしてくる。

単純な大悟は気分を天気は左右されやすい。おまけに自分の好き

なことができないとなれば、機嫌は最悪だった。

大悟は自分でも来週まで我慢していられる自信は無い。

雨が染みてきたせいで、歩く度に嫌な感触がする自分の靴音にイライラしながら大悟は家に向かって歩いていった。

学校でも、教室の中で遊ぶしかない。外で思いっきり遊びたい年頃の男の子にとって、この状況は実に退屈だった。そこで工夫してノートとセロハンテープで作ったボールと、教科書を丸めたバットを使って、教室で野球をしていたが、ボールが教室で絵を描いて遊んでいた女子に当たってしまい、案の定先生に言いつけられて今日怒られてしまった事も大悟の不機嫌に拍車をかけている。

踏んだり蹴ったりとは正にこの事だ。自業自得だとは分かっているけれど。

そして、白崎がスケボーに参加しなくなったこと。解決されないこの問題に、大悟はどうすることもできずにやり場のない思いを抱えていた。

大悟も責任を感じていたのだ。

自分の意地のせいで、無理矢理嘘をつかせてしまったこと。きつと、それが嫌になったんだ。

それとも、最初から俺達とは遊びたくなかったのだろうか。

俺だって女の中で一人遊ぶのなんか退屈だ。遊ぶんだったら男の方が絶対楽しい。

白崎と一緒に遊びたいけど、嫌がっているのが分かっているからどうしようもない。

それが分かってしまったって、大悟は更に気分を沈ませた。

なんだか傘を差すのがめんどくさくなって、大悟は傘を閉じて走

った。

すれ違う人々は、奇異の目で傘を片手に持って雨に濡れながらかけていく小学生を見送った。何人もの人々を抜かして、大悟は家まで後10m程の所で声をかけられて止まった。

「大ちゃん？」

立ち止まって振り返ると、そこに居たのは茜だった。

ピンクの傘に赤いランドセル、靴は濡れないように赤い長靴を履いている。

「何で傘ささないの？」

茜は大悟の右手に握られた黒い傘を見てそういった。顔には笑顔をとたえながら、自分の傘に大悟を入れてあげようと大悟の方に歩いてくる。

自分の身長よりも高い位置にある大悟の頭に合わせるように茜は少し傘を持ち上げて、大悟の上にかざした。

至近距離で見る茜の顔はいつものように笑っているが、何故かそれが癪に障って、大悟は言葉を吐き出した。

「なあ、知ってんだろ？」

それを聞いて茜の笑顔が強張った。その声が、自分の好きないつもの明るい大悟には似合わない、怒りに満ちた声だったからだ。

戸惑う茜の返答を待たず、大悟はたたみ掛けた。

「何でだ？なんで白崎は来なくなっただよ。お前友達なんだろ？知っているよな？」

「し、知らない。」

言葉短に茜は一步下がる。だが大悟に傘をかざしているせいであまり後ろには下がれず、大悟との距離はほんの少ししか離れない。

「何で知らねえんだよ。」

「知らないのは、知らないもん。泉ちゃんはそんな話しなかったよ。何で私が怒られなきゃならないの？」

まだ納得していないような顔で、大悟はそっぽを向いた。その態度に茜は胸の奥で何かが湧き上がっているのを感じる。それが何か分からないまま、こみ上げてくる苛立に言葉をのせて吐き出した。

「きつと、泉ちゃんは私達と一緒にの方が楽しいのよ。」

「うるせえんだよ！」

その言葉を聴いて、大悟が怒りを吐き出した。これまで溜め込まれた苛立ちや不安を指摘され、茜を怒鳴りつけて傘の中から飛び出し、再び雨の中に身をさらす。

「何で・・・何でおこ・・・んの？」

今にも泣き出しそうな茜の顔を見て、大悟はめんどくさそうな顔をする。茜はそれに気付かず、一生懸命涙をこらえて下を向く。

「大ちゃんは・・・泉ちゃんのことを好きなの？」

その問いに、大悟はからかわれたと思ったのか、更なる怒りに顔を赤くする。

「ふざけんな！」

大悟の叫びに茜ははじかれたように顔を上げる。大悟はそのまま茜のことを振り返りもせず走りだした。

溢れ出した涙のせいでゆがんだ茜の視界の中で、大悟の後姿は段々小さくなっていく。

それを見ながら、茜は小さく嗚咽を漏らす。我慢することを放棄した瞬間、茜の目からとめどなく涙が流れ落ちた。

冷たい雨が二人の間に壁となって降り注ぐ。

大悟の姿はもう見えない。

それは二人の間の距離のせいかもしれないし、とめどなく溢れる涙のせいかもしれない。なかった。

6・ゴリ

「おいおい、どうなつてんだよ。」

呆れた様な、怒った様な表情で、ゴリは不満を漏らした。

久しぶりに雨の降らない放課後。集まったメンバーはいつもより人数が少ない。いつも真つ先にゴリに突っかかっていく大悟の姿がそこにはなかった。

「何やってんだよ、アイツは。」

今度ははつきりと苛ただし気な顔をして、ゴリはあらぬ方向を見ながら吐き捨てた。

ゴリは大悟とよく喧嘩をしているが、おそらく皆の前で本気で怒ったことはないのだろう。

だが、今ゴリは怒りを露にしていた。
誰も彼に声をかけられないほどに。

「悪い。俺帰るわ。」

だから、ゴリがそう言った時も誰も理由を聞きもしなかったし、引き止めることもしなかった。

「何なんだろうな。」

誰ともなくヤスが呟く。その言葉に、残された者達は声に出さずに相槌を打った。

「お前何してんだよ。」

ゴリは開口一番そう言った。

彼は大悟の家の玄関に立っている。その玄関のドアを開けたのは大悟だ。

その言葉に反抗しようと口を開きかけたが、大悟は何も言えない事に気付いて口を閉じた。

「上がるぞ。」

しばらく大悟の言葉を待っていたが、何も言わなかったのでゴリは自然に大悟の家に上がり込んだ。だがそれも当然だ。いつも皆の前では喧嘩ばかりだが、二人は幼馴染で、一番古いスケボー仲間なのだから。

今皆と一緒にスケボー出来るのも、二人の努力で仲間を集めた結果なのである。

大悟の部屋がある二階への階段を、ゴリは何も言わずに上がっていく。そして勝手に大悟の部屋に入り、勝手にベッドの上に座った。大悟もその後が続いて部屋に入り、自分の勉強机の椅子に座る。

今度黙るのはゴリの方だった。ゴリは大悟が自分に話し始めるまで何も言わない気なのだ。それを分かっているにも、大悟の口は中々開かなかった。

数分後、大悟は親友に向かって自分の話せることから、話し始めた。

「それで？」

「は？」

大吾は言った本人がそうと気付くくらい、間抜けな声を上げた。全てのことを話し終えた後に、こんな風に言われるとは思わなかったのだろう。

一体ゴリが何を促しているのか分からないまま、大吾はゴリの顔を見た。

「だから、お前は今何をしてんだよ。」

大吾は固まり、何を言ったら良いのか分からず、変な汗をかきながら何とか口を開く。

「いや、だから。俺はどうしたら良いか分かんねえから・・・」

「馬鹿じゃねえのか。」

「は？何だよ！」

ゴリの突然の罵倒に、何のことを言われているのか分からないまま、今まで溜まっていたものが一気に飛び出したように大吾は大声を上げた。

「白崎一人が来ないのが何だって言うんだよ！あいつらは俺達が集めたんだぞ！その俺達がいなくてどうすんだよ！」

「俺は今それどころじゃねえんだよ！そっちはそっちでやりたい奴がやってりゃいいだろ！俺のことはほっとけよ！」

「ふざけんな！」

ゴリの手が大吾の襟首を掴む。ゴリは力任せに大吾の顔を自分の顔に近づけた。

「やりたい奴がやってりゃいいだど！？じゃあ、お前は違うのか？お前はもうやりたくねえってのかよ！」

大吾の顔色が変わった。ゴリの言いたいことを理解したが、その通りにできないことにも同時に気付き、どうしようもない思いがゴリへの怒りという吐け口を見つけて表に現れた。

「しょうがないだろ！あいつは仲間だぞ！ほっとけないだろうが！」

それを聞いて、ゴリは大吾の襟を掴んでいた手を乱暴に離れた。

大吾はその反動で勉強机にぶつかったが、すぐにゴリを睨み返した。

ゴリは怒った様な、呆れた様な、大吾が今まで見たことの無い顔をしていた。

「ああ、そうかよ。ほっとけなくて、お前は白崎に何をしたんだよ。何もしてねえじゃねえか。お前はあれか？あいつに仲間に戻ってきてほしいわけか？」

「そうだよ。その何が悪いんだよ。」

「お前は、あいつにスケボーをやって欲しいんじゃないのかよ！」

ゴリが今までに無いくらい大きな声で親友を怒鳴りつけた。その表情はいつもの生意気な笑顔ではなく、本当の怒りに満ちて、何だか泣きそうにも見える。

だが、大吾は気付いたようだ。ゴリが本当に言いたかったことは何なのか。

大吾は気の抜けた顔で再び勉強机の椅子に力なく座った。まるで糸の切れた操り人形のように。

「俺が何をしても無駄ってことか？」

「そうだよ。どんな時でも、お前のすることは一つしかないだろうが。それを忘れやがって。」

言って、ゴリも再び大吾のベッドの上に座る。

しばらく無言が続いたが、いつもの二人に戻っていた。いつの間にか外は夕暮れになっていて、オレンジ色の光が二人のいる部屋の空気も外と同じように染めている。

しばらくして、ゴリが口を開いた。

「なあ、なんか食べるもんねえの？」

* * *

頭の中は真っ白だ。真っ白のままで、ただ滑り続けている。

日曜日。河原の空き地。しかし、いつも大吾達と一緒に使ってい

るような整備されたものではない。ここは人が使ったための空き地ではなく、自然に草が生えずに土がむき出しになっているだけの場所だった。

いつもの場所とはかなり離れた所にいる。家からもかなりの距離があるだが、知り合いに会わないという面で便利な場所だ。

特に、今の泉のように誰にも会いたくない時には。

知り合いには会わない場所だが、泉は帽子をかぶっている。他人が見たら、男の子と間違えるだろう。

誰の声も聞こえない空き地。そこにはただ、スケートボードの音だけが聞こえて来る。けれど、整備されていない空き地には石が多く滑りにくい。こんな所で滑っていてはすぐにボードが駄目になってしまいかもしれない。

泉の体は熱い。もうすでに2時間近く滑りっぱなしだ。体中汗をかき、足が痛くなっていた。だが、滑る事を止めてしまえば、最近あった出来事が泉の頭の中を一杯にしてしまう。それから逃れるために、泉はひたすら滑り続けていた。

やがて音が止んだ。

ボードを片手に、泉は草の生えた土手の坂に川の方を向いて座った。息を整え、Ｔシャツで汗を吹く。帽子を取ると、髪の中に空気が入り、顔全体に空気が触れる。

風が吹く。汗で濡れた体に当たると気持ちが良い。

「ふーっ。」

空見上げて息を吐く。

そのまま後ろに体を倒し、芝生の上に寝ころがった。
何も考えなくていい空間、時間。

（ずっとこのままだったら楽なのに。）

そう思った瞬間、また、頭の中が現実には埋め尽くされる。
大吾の事、茜の事、皆の事、自分の事、スケボーの事。
目を瞑る。答えは浮かんでこない。
目を開ける。眩しさに目がくらんだ。
視界が白くなる。ゆがんだ光が視界いっぱいに広がる。
泉の目には涙が溢れていた。

（スケボーがしたい。）

けど、何かが違う。もう泉には分かっていた。秀に嘘をついたこと。

一人で滑っていて分かった。

だから余計に辛い。

分からないままで良かったのかもしれない。
だって、このままでいるしかないんだから。

いつもの空き地。

だが、そこでスケボーをやっているのはたった一人しかない。
深い青と緑のボード。健二だ。

最近、メンバーの集まりが悪く、あまり皆でスケボーをやっていない。
だから健二は時々一人で此処に来て、滑っているのだった。

健二も最近皆で集まらない理由は知っている。南小の白崎と大吾が来ないからだ。白崎はともかく大吾が来ないことは、皆に大きな影響を及ぼしているらしい。

だが、健二は大吾よりも白崎が来ないことの方が重要だった。白崎は健二にとって技術でもタイムでも一番のライバルなのだ。

南小のメンバーに話を聞くと、白崎はスケボーを辞めたと言う。

（あいつが辞めるわけ無い。）

健二はボードから降り、右手で近くのベンチに立てかけた。そのまま自分もそこに座る。上を向くと、空の眩しさに目を細めた。

健二も白崎と同じで、ここに来るまで一緒にスケボーをやるメンバーはいなかった。だからこそ、ここで皆と一緒にスケボーをやる時間は他のどのメンバーよりも嬉しかったし、楽しかった。それは白崎も同じはずだ。

『ここに来て良かった。』

初めて健二と白崎が勝負したあの時、確かに白崎はそう言っていた。今までスケボーを制限されていた分、白崎がスケボーを辞めるなんて有り得ない。

（でも、ここには来ない。）

眩しさに慣れると、はつきりと空に浮かぶ雲が描く白い模様を見ながら健二は考えていた。

（でも、きつと辞めていない。）

一匹の鳩が健二の上を通り過ぎる。

「……………」

その時、本当に何の脈絡も無く突然思いついた。

（なら、）

どこを見ているのか分からない目で、健二は立ち上がる。

（どうか、他の場所でやってんじゃないのか？）

健二はボードを掴むと一目散に土手の坂の上を駆け上がった。一番上の舗装された道に出ると、ボードを置き、左足を乗せて、右足を蹴った。

勢い良く健二のボードが土手の上を滑る。

いつの間にか、いつもの空き地は遠ざかっていた。

7・嘘

ふと気がついて帽子を取ると、目の前は赤く染まっている。川の方へ目を向けると、傾きかけた太陽が大きく、赤くなっていた。その光は目に映る全てのものを赤く照らし、今までとはまるで違う世界に変えている。

あらからずつと滑り続けていた泉はベンチに置いていた帽子を取り、ボードを持って家路に着こうとした。

その時、泉が背を向けている土手の方から声がかけられた。

「白崎！」

思わず泉は振り返りそうになる。だが気付いたとたん、体が硬直したように動かない。心臓の音だけが自分の耳に残り、冷たい汗が体中に張り付くのを感じた。

泉は今帽子を取っている。

今の声は確かに男子の声だった。だが、誰の声までかは分からなかった。

振り向くべきか、無視するか。

「白崎？」

もう一度声が聞こえた。

今度は分かった。知っている声だ。

泉は安堵して、振り向いた。その声は秀の声だったからだ。

泉の目の前、土手の上には秀がいた。秀は片手で自転車を支えている。恐らくここまでそれで来たのだろう。秀の顔には汗が浮かんでいた。その表情は複雑な顔をしている。

秀は何も口を開かない。

泉にもその理由がすぐに分かった。

秀の隣、深い青色のスケートボードに乗った少年。

健二だ。

健二は秀よりも汗だくの姿で、その場に立っていた。健二も口を開かない。相変わらず長く伸びた前髪で、その表情は読み取れない。

その時泉はやつと気付いた。

最初に「白崎」と呼んだのは健二だったのだ。

泉は振り向いたことを激しく後悔すると共に、今の状況に困惑していた。答えを求める為か、それとも健二と目を合わせられない為か、泉は秀に目を向ける。

秀は健二には目をくれず、すぐに自転車をその場に置き、土手を駆け下りて泉の元に走ってきた。

だが、誰よりも先に口を開いたのは健二だった。

「白崎？」

泉は健二には目を向けず、助けを求めるように秀を見つめる。それを見て、秀は健二に聞こえないくらい小さな声でささやいた。

「どうする？」

その言葉に、泉は泣きそうになった。

「誤魔化すなら話を合わせる。」

秀は動揺している泉と対照的に、真っ直ぐに泉の眼を見た。

そんなやり取りに気付いていない健二は、何も考えずにボードを手にとって土手を降りて来た。

「お前白崎だろ？」

健二は泉の正面に来了。泉はもう健二を無視することはできない。泉は思い切って健二の顔を見る。

秀は健二に向かって何か言おうとしたが、それより先に泉が口を開いた。

「そっだよ。」

秀の顔が驚きの表情に変わる。

泉は表情を変えず、真っ直ぐ健二の顔を見ていた。心臓は信じられないほど速く振動し、自分がどこを見ているのか曖昧な気さえしてくる。しかし、後悔はしていなかった。それはきつとさっきの健二の態度が、まるで普通の友達に話しかけると変わらないものだったからに違いない。

健二が返事をするまでの時間がとても長く感じられた。泉に見える健二は、ゆっくりといつも笑顔を見せて言った。

「やっぱりな。最近はここで滑ってんのか？」

「あつ、・・・うん。」

「そつか、じゃ俺もここに来ようかな。」

「えっ？なんで？」

「だって、ゴリ達ここんとこスケボーやらねえんだもん。」

「そうなの？」

健二の言葉に驚き、泉は秀を振り返る。泉と目の合った秀は気まずそうな表情になる。

それを見て、泉は嫌な予感がした。だから、もう関わるのは止めようと思いつながらにも訊かずにはいらなかった。

「どうして？」

「・・・最近、集まれる人数が減ったから、あんまり皆で集まってもやらなくなっただけだよ。」

「減った？来なくなっただけは・・・私だけじゃないの？」

「後、強哉と・・・大吾が。」

「大ちゃんが？」

（何で？）

そう顔で訴える泉に秀は無言で答える。二人の気まずい雰囲気、健二は口を出せずにいた。

「大吾も理由は言わないけど、多分きつかけは白崎だと思う。」

「・・・私？」

どうして？どうしてそうなってしまったんだろう。自分が居なくなつて皆には何の支障も無いと思つてた。

動揺する泉を見て、秀は健二の様子を気にしながらも口を開いた。

「あくまで予測だけど、大吾は……。白崎が来なくなった原因は自分だと思ってるんだ。」

「え？」

「……自分のせいで、嘘をつかせてしまった事。後悔してるんだと思う。」

「そんな!!」

大ちゃんのせいじゃない。そんなの全然違う。私はスケボーをや
りたかった。あれはその為の嘘だったんだから。大ちゃんの為じゃ
ない。自分の為の嘘だったのに。

泉の目に涙が浮かぶ。それを辛そうに秀は見つめる。健二が居な
ければ、多分泉の事を抱きしめていた筈だ。

自分の好きな女の子が苦しんでいる。自分を責めている。そんな
時、どうしてやればいい？どうするのが正解なんだろう。

秀はそれ以上何も言う事が出来なかった。

「嘘？嘘って何だ？」

事情を知らない健二は、呆けた顔でそう言った。泉と秀は思わず
お互いの顔を見る。けど、秀に頼ってはいけないと、泉は健二
に向き直った。

「……ごめん。今まで女子だって事、黙ってた。」

「あ、ホントだ。女子だ。」

意外にもあっさりと、健二はそう言った。

「え……。」

「あははははっ。マジだ。そっぴや、何で今まで気付かなかったんだろっな。」

あっけらかんと、笑う健二に泉は呆然と言葉を失ってしまう。

「けど、ここでやってんなら皆と一緒にやればいいじゃん。てっきり白崎も受験で勉強しているのかと思っただぜ。」

「あ……、えっと、だから……。」

女子であることをあっさりと受け止められ、泉はなんと言ったらいいのか分からなくなってしまった。だって、皆と一緒に居られない理由を健二は笑い飛ばしてしまったから。それが理由だなんて言うのは、健二には通じない気がした。

上手く説明できずに言葉を詰まらせる泉を見て「まあ、いいや。」と健二が笑う。

「来週は絶対来いよ。白崎いねえとつまんねえし。」

「でも……。」

「な？」

健二の満面の笑顔。それだけで、泉の心は軽くなった気がした。今まで悩んでいた事がどこかに行ってしまったようだった。

「……うん。」

涙が零れそうになる。

この涙も、健二がどこかへ吹き飛ばしてくれたらいいのに。

泉は健二につられるように、小さく笑った。

その隣で、秀は複雑な気持ちを抱えていた。出来れば白崎の悩みは自分が解決してあげたかった。今まで自分はその悩みに気付いていても、何もしてあげられなかった。

けど今、健二がいとも簡単に泉の悩みを溶かしてしまった。泉が前向きになったのならそれは喜ぶべきことだ。でも素直に喜べない自分もいる。

こんなにつまらない嫉妬だって分かってる。

（ちえ・・・）

秀は泉と健二の後ろ姿を追いながら、自分も土手をあがった。早く自然に、その隣に立てるようになりたいと思いつながら。

8・笑顔

「お、今日は随分機嫌がいいな。」

浩太にそう言われ、土手のベンチに座っていた健二は自分の心臓が大きく鼓動するのを感じた。

「え！？そうか？？」

「何かあったのか？」

「いや、別に・・・。」

「ふーん。」

何とか誤魔化すが、自然と顔が緩みそうになる。だって今日は白崎が来ると約束してくれた日だからだ。久しぶりに白崎と一緒にスケボーが出来る。それが何より嬉しかった。

（それに・・・。）

初めて白崎の顔をまともに見たあの日から、健二は彼女の顔が忘れられずにいた。

夕日に照らされた彼女の笑顔は、自分が知っているどの女子よりも魅力的に見えた。

それが、特別かどうかはまだ分からないけれど。

土手には徐々に仲間が集まりつつあった。その中にまだ白崎、大吾、浜田、秀の姿は無い。

「お、来たな。」

ゴリの一言に、健二は顔を上げた。すると浜田と久しぶりの大吾の姿がある。

「おー、大吾じゃん。」

「久しぶりー。」

各々仲間達に声をかけられ、大吾は気まずそうな照れくさそうな表情で、「おう。」と短くそれに応えた。

ヤスが周りを見渡す。

「後は、秀か。」

「へえ。秀が遅いなんて珍しいな。」

その言葉に、健二は土手の上を見上げた。

（白崎も来る筈なんだ。）

心の中で早く来て欲しいと祈る。きつと来る。だってあの日約束したんだから。

すると、浜田がのんびりとした声で川に架かる橋を指差した。

「ねえ、あれって秀ちゃんじゃない？」

皆が橋を見上げる。確かに秀が自転車で橋を渡りこちらに向かっている。そして、その後ろには女の子を乗せていた。ヤスが口笛を吹いた。

「へえ。女連れじゃん。彼女？」

秀に彼女がいるなんて情報を聞いたことの無い西小のメンバーは

皆首を傾げる。けれど、健二だけがそれが誰か分かっていた。

（白崎だ！！）

「おい。健二？」

浩太の言葉にも答えず、健二は土手の上へ駆け出した。すると秀の自転車が段々と近づいてくる。上まで登りきると、丁度二人が土手に着いた所だった。

「よお。」

健二が声をかけると、「ごめん。遅くなった。」と秀が答える。そして、自転車から降りた泉は無言で健二の顔を見た。今日は帽子を被っておらず、長い髪は高い位置でお団子にしてまとめている。服は控えめに花柄がついた白いＴシャツにデニムのミニパンツ。どこからどう見ても女の子の格好だった。

「おせえよ。」

「・・・ごめん。」

小さな声だったが、泉の顔は笑っていた。それを見て、健二は満面の笑顔を見せる。

「いーよ。早く行こうぜ。」

三人が土手を降りてくると、西小メンバーは怪訝な顔になるが、南小のメンバーは驚き表情で泉の元に集まった。

大吾が真っ先に口を開こうとして、それに失敗する。第一声をな

んと声をかければいいのか分からず、言葉を詰まらせたのだ。その様子を見て、浜田が笑顔で声をかける。

「久しぶりだね。」

「うん。．．その、ごめんね。」

「ううん。僕達こそごめん。今までずっとそんな格好してこなかったもんね。来辛かったでしょ？」

「浜ちゃん．．．。」

他のメンバーも謝ってくれた。自分なりにそれぞれ泉のことを気にしていたのだ。それが分かって、早くこうしていれば、皆と話していれば良かったと思う。

「白崎！」

「大ちゃん．．．。」

それまで黙っていた大吾が声をあげた。

「俺、ホントに．．．。ゴメン．．．。」

「ううん。」

泉も慌てて首を横に振る。

「違うの。皆が悪いんじゃないくて、．．．その。私が．．．。ちゃんと、こうしたいって今まで言葉に出来なかったのがいけないの。だから気にしないで。」

「悪い！俺ちゃんとあいつらにも話してくるから！！」

そう言って、大吾は呆然としていた西小メンバーの方へ駆け出した。

「待って！」

泉も、そして他のメンバーもその後続いた。

大吾は頭を下げて西小の仲間にこれまでのことを説明した。すると、ゴリが啞然と言葉を失っている。

「は？……白崎？？」

「ごめん……ね。あの、私……」

「いや、ちよつと待て！！」

ゴリは両手で頭を抱えて泉から目を逸らす。なにやらブツブツ人事を言っているので、他のメンバーは無視して泉に声をかけた。

「マジ全然気付かなかったー！」

「なんだよ。最初っからそう言ってくれば良かったのに。」

「あの、ごめんね。」

「いって、全然。あ、ゴリは気にしないでいいから。」

まだゴリは隅で一人頭を抱えていた。

心配そうにそれを見る泉に、秀が笑って声をかける。

「ゴリは頭が固いんだよ。ほっとけば平気。」

「うん。でも……」

「そんなことより、久々全員集合なんだから早くやろーぜー！！」

我慢できない、という様に健二がゴリに向かって叫ぶ。表情の硬かった泉は思わず笑みをこぼした。

土手に着いた時もそうだ。健二が笑顔で迎えてくれなかったら、勇気が出なかったかもしれない。

それに、秀が自転車で迎えに来てくれたから、まっすぐに皆の下へ向かう事が出来た。

泉は健二と秀を見た。

「秀ちゃん。健二。」

呼ばれた二人は同時に泉を見る。

「ありがとう。」

泉は笑顔で心からの感謝を言葉に込めた。二人にとっては今までで一番の泉の笑顔。

「うん。」

そう短く答えた秀に対し、健二は言葉を失っている。

「健二？」

泉が一步近づき顔を覗き込むと、健二はハッ、と息を飲んで後ずさりした。

「どうしたの？」

「べっ……べっに……!!」

するとそれを見ていた浩太が、ニヤリと意地悪な笑みを浮かべる。さつと健二の後ろに回りこむと、彼の腕を抱えて動きを封じた。

「あ！おい！！！浩太何すんだよ！」

「何？健二、照れてんの？」

「ばっか！ちげえよ！！！」

それに段々と皆も加わってくる。

「そういや、健二の前髪って鬱陶しいよな。」

「そうそう。よく顔見えないし。」

「んな！！そんなの今は関係ねえだろ！！！」

それに大吾も加わって今度は健二の足を押さえた。

「あ、コラ！大吾！！！」

「浩太そのままでいろよ！」

「任せろ！」

「ちょ、お前ら！！！」

浩太と大吾の二人に抑えられ、健二は身動き出来なくなる。びつくりして泉がそれを見ていると、ヤスが隣に立って泉に話しかけた。

「白崎。ちょっと健二の前髪上げてみ？」

「ばか！！ふざけんな！！！」

確かに今まで表情の見にくかった健二の顔には皆だけではなく、泉だって興味がある。

健二に悪いとは思いつつも「ごめんね。」と言って、泉は健二の

顔に手を伸ばした。そしてちょっと汗ばんでいる額からそつと前髪をすくい上げる。

「！」

前髪に隠れていた健二の顔は、真つ赤に染まっていた。それを見て、一斉に皆が笑い出す。その反応に更に健二は顔を赤くした。

「デメエら！覚えてろよ！！」

「あははははっ！何？もしかして、健二って赤面症？」

「前髪つてそれ隠す為だったりして〜。」

「ウケるー！！腹いてー！！！」

皆の笑い声が川原に響く。手足を開放された健二は皆に笑われ、すっかり機嫌を損ねていた。

泉はそつとその隣に移動して、顔を覗き込む。

「ごめんね？」

「うっさい。こっち見るな。」

よほど恥ずかしかったようで、健二はそっぽを向いてしまった。

大吾は腹を抱えたまま二人を見る。

「まーまー、いーじゃん。これでもう俺達の間には秘密はないってことで。」

皆が泉を見る。泉は改めて皆に頭を下げようとした。けど、それを健二が止めてくれた。

「もういいんだって。おあいこ。」
「うん。」

ああ。心が温かくなる。

素直になって良かった。皆と一緒に居たいんだって、スケボーがやりたいんだって。行動に移して良かった。皆が受け入れてくれた。許してくれた。

皆の笑顔を見ていると、親友の顔が浮かぶ。

大丈夫。茜だって話をすればきっと元に戻る。分かってくれる。

自然と表情が笑顔になる。皆と居れば自信が持てる。

「皆。ありがとう。」

必要なのは謝罪じゃなくて、感謝の言葉。
そして笑顔。

皆が、泉の笑顔に釘付けになる。思春期の男子にとって、心からの女子の笑顔は少なからず心に響いたらしい。

皆の反応を見た秀は、思わず泉の隣に進み出た。そして泉の肩に手を置くと、その体を自分の方に引き寄せる。

「じゃあ、俺も秘密を話すよ。」
「え？」

きょとん、と自分の方を見上げる泉の顔に秀は満面の笑顔を向ける。

「俺、白崎のこと狙ってるから。手え出さないでね。」

えー！！と皆が一斉に驚きの声を上げる。泉は驚きのあまりに声も出なかった。

秀がちらりと健二を見ると、真っ赤だった顔を青くして言葉を失っていた。

それから三十分後。河原では少年達の声とスケートボードの音が休みなしに聞こえている。その中に一人、少女の姿もあった。

少年も少女も笑顔が耐えない。汗だくになりながら、それも気にせずに彼らは走り続けている。

少女はタオルで汗を拭きながら空を仰いだ。

もうすぐ一年で最も暑い季節が訪れる。そんな予感をさせる真っ青な空だった。

完

8・笑顔（後書き）

『きみとスマイル』を最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

何故、小学生が主人公なのかというと、橘が小学生の時に考えたお話だからです。

小学生が主人公の話なんて読む方はいらっしやらないんじゃないかと思っていましたが、杞憂に終わりほっとしております。

彼らの恋の行方には結論を出さずに物語は完結しましたが、別の形で続編をご用意しております。結末が気になる方は別小説『神様の失敗談 第二話』を御覧いただければ幸いです。

誠にありがとうございました。

2009/12/30

橘

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0107j/>

きみとスマイル

2010年10月9日03時55分発行